
筑紫女学園大学リポジト

'Sekaten" of Karaton Surakarta : The Practice of Islam in Central Java

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田村, 史子, TAMURA, Fumiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/281

スロカルト王家の儀礼「スカテン」
―中部ジャワにおけるイスラームの実践―

田　村　史　子

“Sĕkaten”of Karaton Surakarta
―The Practice of Islam in Central Java―

Fumiko TAMURA

はじめに

スカテン Sĕkaten は、ジャワ暦ムルッド Mulud（または、マウルッド Maulud）月[1]12日のイスラームの預言者ムハンマド Muhammad の生誕日を記念する祭＜Maulud Nabi Muhammad SAW[2]＞において、ジャワに存続する四王家[3]によって行われる儀礼である。西部ジャワのチルボンの新旧二王家、カノマン Kanoman とカスプハン Kasĕpuhan、中部ジャワのスロカルト Surakarta とヨグヤカルト Yogyakarta の二王家が、それである。儀礼の内容の細部は王家によって異なるが、そこにいくつかの重要な共通点が見られる。すなわち、１．通常は王宮の奥深くにプソコ pusaka（霊力を持つとされる宝物）として秘蔵してある特別なガムラン gamĕlan（青銅楽器のセット）が主要ムスジッド Mĕsjid（イスラームの礼拝所）に運ばれ、その演奏が優位的に儀礼の中心を成すこと。２．ハジャッ hajat と呼ばれる儀礼的に神にささげられる供物が、山車や大皿や象の背に載せるなど特別な形で供せられ、その巡行と人々への分け与えが行われ、王と人民との一体化が演出されること。３．その実践には、イスラーム以前のヒンドゥー・ジャワ的要素が色濃く混淆していること、などである。そもそも、原初イスラームの伝統を残すアラビア地域では、当該の生誕記念日はそれほど盛大には祝われることはないという[4]。ここに、ジャワの伝統的な祖霊・英霊崇拝儀礼の影響を見て取ることができよう。

イスラームが中部ジャワ内陸部～南部＝ジャワの核心部に本格的に導入されたのは、17世紀前半、イスラーム・マタラム王国の第三代の王スルタン・アグン Sultan　Agung（在位1613～1645）の時代である。その象徴ともいえるものがイスラームのヒジュラ暦[5]と、それ以前に用いられていたヒンドゥー・ジャワ（サカ）暦とを折衷させたジャワ暦[6]の制定である。現在は西暦が一般に用いられるが、さまざまな宗教的活動はジャワ暦に準じて執り行われる。また、原初イスラームでは禁止されていた音楽、舞踊等の表現芸術が、ここ、ジャワにおいてはイスラームの実践と密接に結びつきその表現力を高めて、様々な芸能形態が生まれている。

ヒンドゥー・ジャワの成熟した文化総体に取り込まれた形のイスラームは、その実践においてき

わめて独自の多文化融合的な様相を見せる。ここでは、イスラーム・マタラム王国の末裔であるスロカルト王家によって執り行われる「スカテン」を事例に、その様相の読み解きを試みたい。
（なお、本論文中のジャワ語の意味あいおよび表記は主としてスラカルタ地方の用法や発音のシステムに従っている。「ĕ」は［ə］と発音される。ジャワ語に添えたカタカナはできるだけ現地の発音に近い音を選んでいる。また、初出のみカタカナ・ラテン綴りジャワ語・対応する意味を併記し、その後は、必要に応じてそのいずれかを用いる。）

Ⅰ．ジャワにおける王国・王権

1．イスラーム・マタラム

イスラーム・マタラム（または新マタラム）と呼ばれる王国の起源は1578年頃とされ、中部ジャワ南部の肥沃な農業地帯であるヨグヤカルタ地方にその中心を置く。８～10世紀にかけてヒンドゥー・マタラム（または古マタラム）がこの地に栄えたのち、中・東部ジャワを統べる王国の中心は東ジャワに移ったが、ほぼ700年の時を経て故郷に回帰したわけである。それは、13世紀のころからインドネシア島嶼部周辺部に伝来し始めた神秘主義的イスラームが、ジャワの核心部に到達、定着したことを示している。イスラーム・マタラムは三代の王スルタン・アグン（在位前出）の時代に勢力が頂点を極め、その領土は中・東部ジャワのほぼ全域をおさめ、マジャパヒト[7]にも匹敵するほど広がりを見せた。また、この時代にイスラームの摂取が本格化した。その後王国は内紛とオランダ東インド会社の介入によって領土や権益を失い、1755年には、スロカルト王家とヨグヤカルト王家に分裂する。第二次世界大戦後、インドネシア共和国成立により王国は政治的・経済的権利の大部分を失うが、伝統文化の中心としての求心力は持ち続け、依然として人々の精神的な規範であり続けている。

ジャワにおける王国は、政治的支配によって区切られた領土としてよりも、王の持つカスクテンkasĕkten[8]（霊力）の“及ぶ限り”の領域を意味してきた。中部ジャワの王たちが、パク・ブウォノ Pakoe Boewana（地球・宇宙の釘）やハムンク・ブウォノ Hamĕngkubuwana（地球・宇宙の守り手）、などの名を持つことにも示されているように、“王”は“神”と両義の“gusti”と呼ばれ、そのカスクテンによって地球を含む宇宙の秩序と調和を保ち、また、“神の子”と両義の“kawulo”と呼ばれる“人民”を保護するものであるとされた（この考え方を＜manunggaling kawulo gusti＞と呼ぶ[9]）。王宮は宇宙の中心であり、さまざまな秘儀の力の充満する聖なる空間である。そこには、不思議な力をまとっていると信じられているガムランの楽器セットが多数保有され、楽師達が定期的にその音を充満させる。王と南海の女神との霊的な結びつきを示す王権神話が、舞踊の形で表現される[10]。多様なレパートリーのサジェン sajen（供物）[11]が綿密な暦に従ってさまざまな霊的存在に供され、年に数回、重要な儀礼が執り行われる。王宮の深部で行われるこのような秘儀的行為は、ヒンドゥー・ジャワ的な色合いを強く残すものである。外部の人々とっては“幻”であるそのような音楽や舞踊の定期的な実行が、地球と宇宙との平安を保つのだと感じられているのであり、それを執り行うことが王家の義務であり、存在理由でもある。そして、蓄積された王宮内の力は、「ス

カテン」などの王宮の外部で行われる儀礼の折に、音楽とともに放出され、人々に受け取られる。

イスラームを標榜し、王の名前にススフナンやスルタン、といったイスラーム圏の支配者の称号を用いながら、そこには、ヒンドゥー・マタラム期におけるヒンドゥー教と仏教の混淆と土着の信仰文化への取り込み、さらにマジャパヒト王国を中心とするヒンドゥー・ジャワ文化の深化、密教的・神秘主義的傾向の強まり、といった、重層的な文化総体をベースとするヒンドゥー的王権観念が強く内在していることが感じ取れる。

2．スロカルト王家　Karaton Surakarta

スロカルト王家は、1746年に現在の地に王都を移した。その地スラカルタ（旧名ソロ）は、ムラピ山とラウ山とに挟まれた肥沃な平原の中心にあり、ジャワ最長の大河ブンガワン・ソロを擁し、商業・交易の要所である。（Surakarta は王家の名称として用いられるときはジャワ語の発音体系に従い＜スロカルト＞という音に近いが、地域や都市名として用いられるときはインドネシア語として用いられ、＜スラカルタ＞となる。）王の正式名称として Sampeyandalĕm Ingkang Sinuhun Kangjĕng Susuhunan Pakoe Boewana Senopati Ing Ngalogo Ngabdulrahman Sayidin Panatagama Kalifatolah Ingkang Kaping－－を用いる。Sampeyandalĕm Ingkang Sinuhun Kangĕjng までは敬称、Susuhunan はジャワで創設されたイスラームの指導者の呼称、Pakoe Boewana は前出のように＜地球・宇宙の釘＞を意味する王の名、Senopati Ing Ngalogo Ngabdulrahman は軍の指導者であることを示し、Sayidin Panatagama Kalifatolah はイスラームの導師であり保護者であることを意味する。Ingkang Kaping はそのあとに数字が来て何代目であるか意味する。この長大な正式名称は王が軍事的なトップであるとともに、イスラームの擁護者であることを内外に明確に示している。

王をラトゥ ratu とも呼び、その居場所として王宮のことを、カラトン karaton（ka−ratu−an の母音結合形）、または、クラトン kĕraton と呼ぶ。カラトンにおいて、文芸や表現芸術が極めて高度に発達したが、それは孤高の文化というのでなく、周囲の村落を中心とする土着の文化との絶えざる相互交流を特徴とする。18世紀半ばからオランダ植民地勢力によって囲い込まれ[12]、さらに、インドネシアの独立と共和国の成立後、劇的に政治的・経済的立場を失ったにもかかわらず、依然として文化の中心であり続けている理由の一部はそこにあろう。

当家の主催する儀礼の種類は多様で、王族たちの通過儀礼として、結婚式 Pernikahan、割礼 khitanan、ジャワ暦による生誕記念日 Tingalan Wiyosan Dalĕm などが、宗教的儀礼として、戴冠式 Juměněngan Nata、戴冠記念 Tingalan Juměněngan、ジャワ暦新年のプソコ巡行 Kirap Pusaka、断食月21日の Sĕlikuran、ムハンマドの誕生祭 Sĕkaten、イスラームの大祭（Idul Fitri 断食明け、Idul Adha 巡礼月）に伴う山車巡行 Garĕbĕg、などがある。最後の３者がことにイスラームとの関係が深いものである。

このような儀礼と日々の祭礼の執行、王宮の維持運営のために、現在でも500人以上の人員が雇用されていて、全体は大きく９部署に分かれて組織されている。彼らはアブディ・ダルム abdi dalĕm（王の召使い）と呼ばれる。その中で、イスラーム関係の儀礼に特に関わってくるのが、㋐Yogiswara，㋑Kĕputren，㋒Mandrabudaya である[13]。㋐Yogiswara はイスラームのウロモ ulama

（導師）たちを管轄し、㋑Kĕputren は様々なサジェン供物を用意し、㋒Mandrabudaya はガムランの楽器の調整、保護から、演奏に至るすべての仕事を管轄する。

ガムランによる音楽カラウィタン karawitan[14]は、どのような儀礼にも欠かすことのできないきわめて重要な要素であり、そのために、往時は150人、現在でも50人の演奏家を擁している。この数は全雇用者の十分の一を占める。演奏家はアブディ・ダルム・ニヨゴ abdi dalĕm niyaga とよばれ、そのリーダーであるティンデ・カラウィタン tindhih karawitan[15]は要職の一つである。宮廷内で確立された音楽理論、様式、楽曲のレパートリー、演奏様式、楽器編成、などは、現在まで、ジャワの音楽の重要な基礎となっている。

Ⅱ．スロカルト王家のスカテン

1．スカテンとは

スカテンの起源については、民間伝承に頼るところが多々ある。しかしながら、それが、イスラームの導入期に、人々を新しい宗教に入信させるための様々な工夫の中から生まれたものであろうことは確かである。この時代のイスラームの聖人たちワリソンゴ[16]の一人スナン・カリジョゴ Sunan Kalijaga は、既存の芸能にイスラーム的要素を加味して、より表現力のある新しい芸能形態の創出を促進した人物として名高い。トペン Topeng（仮面舞踊）、ワヤン・クリ Wayang Kulit（影絵芝居）・ワヤン・ゴレ Wayang Golek（人形芝居）、など、様々なジャンルのものを挙げることができる。ジャワ北海岸のドゥマック Dĕmak 王国[17]に、中部ジャワでは初めて本格的な大ムスジッドが建立されたのは1548年で、これも、スナン・カリジョゴの偉業と伝えられている。スカテンの始まりはここにあると言われている。その時作られたガムランは、のちに西部ジャワのチルボンのカノマン王家の所有になった、という伝承があり、現在、スカテンの折に演奏されているのが、当該のガムランであるという。

スカテンという言葉の意味にも、いくつかの説がある。Sĕkaten という語の語幹は sĕkati であり、この語は sĕka−ati または sĕsĕk−ati と分解することができる。ati は心・気持ちの意で sĕka は嬉しい、sĕsĕk はドキドキする・胸が詰まる、などの意である。このガムランを聴いた人々の気持ちを表しているのではないかと言われる。また、sĕkati の sĕ は１、の意、kati は重さの単位で、約0.6キログラムに当たる。楽器の一つサロン saron（後述）の鍵盤一枚の重さを表しているという[18]。

2．スロカルト王家のスカテンの実践

ここでは、スロカルト王家で実践されているスカテンの儀礼全体を、1970年代から始めた筆者の調査と現在のティンデ・カラウィタン（ガムラン奏者のリーダー）KRA Saptodiningrat 氏の記述[19]および話しに基づき論述する。儀礼は、ジャワ暦ムルッド月の５日から生誕日の12日までの一週間行われ、全体が大きく以下の四つの主要素から構成される。

A．ガムランのムスジッドへの行幸　hamatĕdhakakĕn gangsa sĕkaten

B．ガムランの演奏 natab gangsa sĕkaten

C．ウィルジュンガン wilujěngan（イスラームの祈りとサジェンの神人共食）

D．ガルブッグ・ムルッド Garěběg　Maulud（誕生日当日の祝いの儀礼）；ハジャット・ダルム hajat dalěm の巡行と分け与え

A．ガムランのムスジッドへの行幸　Hamatědhakakěn Gangsa Sěkaten

ガムランは、金属（青銅・真鍮・鉄など）の旋律打楽器を中心とする合奏音楽である。その歴史は詳らかではないが、古くから行われていた共同体での合奏音楽の実践に、外部の文明が運んできた青銅などの金属の楽器が結びついて、７～９Ｃのヒンドゥー教や仏教の寺院のレリーフに見られるような原型的形態が生まれたようである。14Cのころには、マジョパイトが青銅製のゴングを東南アジアの各地に輸出しており[20]、文献にもガムランに関する記述が多く見られることから、現在のガムランの基本形はこの時代にできあがったと考えられる。その後イスラーム文化などの影響も受け、16～17C ごろには現在のガムランの形が完成した。その過程で、イスラーム・マタラム王国の、さらにスロカルト王国の果たした役割は極めて重要である。現在、スロカルト王家には15世紀から現在までの来歴のあるガムランが数十セットプソコとして保管され使用されている。当儀礼で使われるガムランのように製造年代が特定できるものが多いことは、特に貴重である。

スカテンのおりにカラトン（王宮）の外に運び出されるのは、「ゴンソ・スカテン（または、スカティ）gangsa sěkaten（または、sěkati)」という特別にサイズの大きな二セットのゴンソ（ガムラン）である。ここで新出した＜ゴンソ gangsa＞の語はガムラン gamělan の丁寧語（クロモ krama）[21]であり、ほぼ同義語だが、＜ガムラン＞が真鍮製や鉄製の物も含むのに対して＜ゴンソ＞は青銅製の上質のものを指す。カラトンでは通常、＜ゴンソ＞の語が用いられる。以下の記述では、煩雑さを避けるためより一般的に用いられている＜ガムラン＞の語を用いるが、原典のテキスト中に用いられている場合や、固有名詞に近いような使われ方をする場合は＜ゴンソ＞の語を用いる。この二セットのゴンソは、それぞれ、“Kyai Guntursari（雷鳴の精華)”, “Kyai Gunturmadu（雷鳴の蜜)”という銘をもつ。Kyai は敬称で、力のある人や物に付けられる。前者は西暦1644年（ジャワ暦1566年)[22]、スルタン・アグンの治世の最後に、後者は　1810年頃、パク・ブウォノ IV の治世に作られたと伝わっている[23]。普段はクラトンの秘奥にプソコ（宝物）として収蔵し、定期的にサジェン（供物）を欠かさない（p148俯瞰図の B)。ジャワ暦の一年に一度のスカテンの時のみ演奏され、それ以外の機会には特別の理由と王の許可がない限り音を出すことは許されていない。このように、特定の儀礼においてのみ演奏される種類のガムランのことを gangsa pakormatan ゴンソ・パコルマタン、と呼ぶ[24]。その力にランクはあるものの、プソコには超自然的な力・霊力があると信じられ、非常にクラマッ kramat（畏敬)[25]されている。ガムラン・スカテンは強力な厄除けの力があると信じられている。

儀礼の主要部分の行われるムスジッド・アグン（大礼拝堂）は、スロカルト王家がこの地に遷都してすぐに王家によって建立された、木造ジャワ様式の非常に美しい建物である。カラトンの西側に位置し（p148俯瞰図の２)、現在も王家と密接な関係を持つ[26]。中庭に南北に対面して設置された建物バングサル・プラドンゴ bangsal　pradonngo[27]（p148俯瞰図の A）はスカテンの間のガムラン演奏専用の場として用いられ、それ以外の時は他の目的で使うことは許されていない。

当ガムランのカラトンからムスジッドへの移動を、＜hamatědhakakěn＞という語で表す。この語は、王がカラトンから出て（原意は“降りて”）行幸するという意味の語 tědhak の他動詞形であり、“行幸させ奉る”の意になる。その力が王の持つカスクテン（霊力）と同等であり、その臨場の栄に浴する者は、ブルカ bĕrkah（高位のものから与えられる祝福と浄化の力）を与らえる、と考えるのである。従って、このガムランは最高の敬意を持って扱われる。ガムランの演奏家たちのリーダーであるティンデ・カラウィタンがその全責務を負う。その行幸のプロセスは以下のようである。

①「ゴンソ・スカテン」及び、その他の重要な楽器の清掃とお浄め。

儀礼の一週間前、それぞれの収納場所で、楽器の清掃とお浄めが行われる。それに伴い香が焚かれ花が供えられ、食べ物を中心とするサジェン（供物）と生贄として鶏が用意される。（写真２）

②王の命令によってガムランをムスジッド・アグン（大礼拝堂）に運び、正式にイスラーム側にゆだねる。スカテンの初日（ムルッド月の５日）の朝、ガムランはジャスミンの花を飾られて、粛々とムスジッドに運ばれ、南北の建物に設置される。（写真３、４、５）

ガムランの行幸に当たっての王の命令の次のような経緯でつたえられる。

王→Mandrabudaya のリーダー→
ガムラン演奏者のリーダー　ティンデ・カラウィタン→
ムスジッド・アグンの責任者タプセル・アノム Tapsir Anom（注26参照）

その命令のポチャパン（口上）の一例として、Mandrabudaya のリーダーからティンデ・カラウィタンに対するものを以下に挙げる。

Pakĕnira tampa dhawuh dalĕm ***hamatedhakaken*** *sarta hamasrahaken kagungan dalĕm gangsa Sekaten kyai Gunturmadu saha kyai Guntursari marang Panitiya hing mĕsjid agung kinen hamapanake hing Bangsal Pradangga lan rumĕksa kawilujĕngan wiwit dina iki nganti pumaning upacara Maulud Mabi Muhammad Salalahu Allaihi Wassalam,nuli tindakna.*[28]

（王の命令である。王の所有なる“Kyai Gunturmadu”と“ Kyai Guntursari”のゴンソ・スカテンをムスジッド・アグンに行幸させ奉りムスジッド・アグンの責任者に委任し、建物バングサル・プラドンゴに大切の安置し、今日からムハマッド生誕記念日当日まで、その安全を守るようにつたえよ。筆者訳）（写真４）

B．ガムランの演奏　Natab Gangsa Sĕkaten

スカテン初日、王家の要職者たちを多数迎えて、生誕記念祭の始まりを祝うイスラームの礼拝がムスジッド・アグンで行われる。それが終わると、王の使者が来訪し、楽器の前で待つティンデ・カラウィタンに演奏を初めるように伝える。通例、13時ごろである。それ以降、ムルッド月の12日までの一週間、イスラームの通常の礼拝の時間[29]を除きガムランは常に演奏される。祭りあるいは宗教的儀礼においてこれほど音楽の役割が際立っている例を他にあまり見ない。演奏家の数が減った現在は、朝の10時から真夜中までの演奏であるが、かつては、24時間演奏されたという。イスラー

ムの礼拝の場であるムスジッドに、まさにヒンドゥー・ジャワ的なガムランの青銅の響が充満し、礼拝の時間を知らせる朗誦アッザーンやイスラームの聖典クルアンの朗誦など、イスラームの正調な音声が、そこに、日に数度の節目を印す。人々は、そのガムランの響に浸り、楽器の持つと信じられる霊的な力に触れるために、近郊、遠方からぞくぞくとやってくるのである。

ゴンソ・スカテンは形状・編成、演奏法、レパートリー、すべての点で他の一般的なガムランと異なる際立った特異性を持っている。

①楽器の特異性；

通常のガムランは、ペロッグ（沖縄音階に似た５音音階）とスレンドロ（民謡音階に似た５音音階）という異なる２系統の音階に基づく楽器群を、同一の楽器セットの中に含んでいるが、スカテンの場合はペロッグ音階のみであり、その大きさ、音高、編成、すべて、通常のガムランとは異なる。サイズは、通常のガムランの二分の三以上、音高は“Kyai Gunturmadu”が　度ほど、“Kyai Guntursari”が　度、通常のガムランより低い。その編成は柔らかい音の楽器と、通常はテンポをリードする太鼓を含まない独特なもので、以下の通りである。バリ島の古いタイプの儀礼用のガムランとの共通性もあり、特に、ヒンドゥー・ジャワ的要素を色濃く示しているといえる。その響きはきわめて低音でよく響く力強いものである。まさに、その名のごとく、雷のよう響き渡る。

編成楽器　（写真６－①～６－⑥参照 p149）
ボナン　bonang（青銅製壺型の小型ゴング14個を並べた楽器・メロディーをリード）
サロン・ドゥモン saron dĕmung（青銅板を７枚並べたザイロフォン、低音域）×２
サロン・バロン　saron barung（青銅板を７枚並べたザイロフォン、中音域）×４
サロン・パヌロス saron pĕnĕrus（青銅板を７枚並べたザイロフォン、高音域）×２
クンピヤン　kĕmpyang（青銅製壺型の小型ゴング２個を並べた楽器）
ゴング・アグン gong agĕng（青銅製大型ゴング、二つ一組）
ブドッグ　bĕdhug（大型の鋲打ち両面太鼓）

②演奏様式・方法の特異性；

南北の建物にそれぞれ配置されたゴンソ・スカテンが、交互に演奏される。南に配置された“Kyai Gunturmadu”が優位であり、先に演奏される。イスラームの礼拝の時間と演奏家たちの食事の時間を除いては、常に演奏が続けられる。楽器ボナンが合奏のリーダーであり、ティンデ・カラウィタンがその役を務める。彼が独奏する長大なラチアン racikan という旋律型は、スカテンの演奏にもっとも特徴的なものである。その演奏様式はいわゆる音頭・一同形式[30]の一種といえるもので、ボナンの長いフレーズの節目・節目に、サロンが一斉にその最後の音をたたく。イスラームの祈りにおいて、ウロモ（導師）の祈りの言葉に呼応して人々が“アーメン”と唱和する、そのかけあいと、非常に通ずるものがあり、まさに、ガムランの楽器によるイスラーム礼拝の読み替えと言えよう。また、この時以外は実際に音を出してのリハーサルは行えないので、演奏家には強い記憶力と高い音楽性が求められる。そこに、宗教的儀礼における修業者にも通じる様な厳しさを感じる。

③レパートリーの特異性；

このときのみ演奏される三つの秘曲がある。㋐　ランブ Rambu　㋑　ランクン Rangkung　㋒　バラン・ミリン Barangmiring、である。これらをグンデン・ワジッブ gĕndhing　wajib（課題の曲）と呼び、㋐と㋑は、演奏を始める大事な節目には必ず、㋒は午後に一度演奏される。その来歴はつまびらかではないが、いずれも、他に類例のない名曲であり、ユニークなメロディーを持つ。Rambu はアラビア語の robbuna（“私の王たる神よ”の意）、Rangkung はアラビア語の rokhum（“偉大なる魂”の意）のジャワ語訛りであるとも言われ[31]、イスラームとの深いつながりを推測させる。メロデーィや曲の構造は異なるが、曲の名称は前述の四王家に共通であることから、スカテンのもっとも核となる曲群であることは間違いなく、これ自体がプソコであるといわれる。この曲群のほかにも、多くの楽曲が独特の様式で演奏される。

C．ウィルジュンガン Wilujĕngan（イスラームの祈りとサジェンの“神人共食”）

ジャワにおけるイスラームの実践の例として、ウィルジュンガン wilujĕngan（または、クンドゥレン kĕnduren）と呼ばれる作法ある。サジェン sajen（供物）と花と香と、場合によっては生贄をそなえて、ウロモの先導でイスラームの祈りを行うものである。スカテン以外でも、様々な儀礼や祭りの一部として、共通の内容で行われるものである。祈りのテクストは、アラビア語、ジャワ語の混じるもので、前述したようにウロモの祈りとそれに呼応する人々の“アーメン”の唱和とのかけあいによる、音頭・一同形式の一種といえるものである。そのあと、サジェンはロロタン（神からの下がりもの）として、その場にいるすべての人々によって“共食”される。スカテンにおいては、二種類のウィルジュンガン wilujĕngan（または、クンドゥレン kĕnduren）がある。

㋐　毎日午前と午後の二回、楽器と演奏の場にサジェンを供えて行われるもの。

㋑　誕生日前日の夜、王宮内で、東西南北を守る神々への盛大なサジェン供物が捧げられ、大規模に行われるもの。これは、ウク・ドゥクッタン wuku dhukutan[32]とも呼ばれる。

D．ガルブッグ・ムルッド　Garĕbĕg　Mulud（誕生日当日の祝い儀礼）；ハジャット・ダルム hajat dalĕm の巡行とその分け与え

誕生日当日の祝い儀礼をガルブッグ・ムルッド　Garĕbĕg　Mulud[33]と呼ぶ。当日の朝、ゴンソ・スカテンが一旦王宮に戻される。そして、昼前、王宮からグヌンガン Gunungan[34]と呼ばれる、〈男と女と子供〉に比えられる三体一組の山車の形に整えられたハジャットと、箱に入れられかつがれたハジャットが、王宮からムスジッド・アグン（大礼拝堂）に向けて出発する。ハジャット hajat はアラビア語起源の語で、宗教的な行為、それを行う意欲や約束、それを表すために用意される供物、などを意味する。この日のハジャットは、ハジャット・ダルム（王の）と呼ばれ、王から人々への力と平安の分け与えを意味する特別のものである。その出発は３種類のゴンソ・パコルマタンの演奏に送られ、「ゴンソ・スカテン」が、演奏しながらその巡行を先導する。

ムスジッド・アグンでは、盛大なイスラームの礼拝が行われ、ハジャットに祈りが込められる。その後、ハジャットは人々に分け与えられる。聖なる力の分け前をもらおうと非常に多くの人々が集まり、実際には統制がきかなくなって、先を争い略奪のような状態になるる。その一部をもらった人々は、それぞれの在所に持ち帰り人々に分配する。こうして、王の力は広がっていく。

Ⅲ．おわりに

１．スカテンの意味づけ

①王家とイスラームとの相互補完的装置

イスラーム導入期には、王家とイスラームは相互補完的関係にあった。王家はイスラームとそれ以前のヒンドゥー・ジャワ的信仰体系とを混交させて、王家の存在基盤となるべき王権神話を作り上げた。イスラームは信者と信仰の場とを獲得した。スカテンはまさに、両者を結びつけるシンボル的儀礼であるといえる。イスラームの側から見れば、「ゴンソ・スカテン」は人々をひきつける圧倒的な力を持つものであり、多くの人々をムスジッドに誘い入信させる効果が期待された(35)。スロカルト王家のスカテンにおいても、様々なレベルで両者の相互補完的関係を確認する作法が繰り返し執り行われることは、II 章の記述によって明らかであろう。

②青銅楽器の圧倒的な響きの影響力の顕在化

青銅楽器は他の素材の楽器に比べて圧倒的に強力な響きを持つ。肉厚な金属の振動は人の肉体と心に強く影響を与え、人々を共通の場に引き込む。アジアの各地で、非常に古い時代から青銅の楽器が共同体の宗教的行為において用いられてきたことはつとに知られていることである。特に東南アジアでは、青銅楽器の合奏が各種見られる。「ゴンソ・スカテン」は、このような青銅の楽器の響きの影響力を最大限引出し、その力を顕在化させたものといえる。年に一度の出会いを心待ちにし、その響きと楽器との接触から、命の蘇りと平安とを受け取ることを期待する人はとても多い。その名の、〈Guntursari 雷鳴の精華〉と〈Gunturmadu 雷鳴の蜜〉は、象徴的であるといえよう。

③王家の聖なる力の造形化～王と人民の一体化の演出

王宮は宇宙の中心でありさまざまな秘義の充満する聖なる空間であるとⅠ章で述べた。王宮の深部で現在も行われているそのような秘義的行為は、きわめてヒンドゥー・ジャワ的な色合いを持つものであり、イスラームの基本的な教義とは直接関係のないものである。それをイスラームと結びつけることによって、王宮内に蓄積された神秘の力を外に向かって放出し、王のカスクテン(霊力)を強力なプソコである「ゴンソ・スカテン」という楽器の形に造形化し、その力を人々に深く再認識させるのが、スカテンの役割の一つである。王と人民との一体化〈manunggaling kawula gusti〉（注９参照）の目に見える形での演出であるといえよう。

④伝統の肉体的、総合的な伝承

スカテンにおけるすべての行為は、明確な方法と実践法に則って遂行される。祈りの方法、清め、演奏、山車の作成など、その内容や次第は文字化されていず、そのすべては、王の命令を肉体表現として顕在化させる形で実現する。それは、音楽担当、宗教担当、供物担当など、さまざまな部署の協力によって成り立つ大きなパフォーマンスである。スカテンの実行によってクラトンの伝統は総合的に伝承されていく。

２．将来の展望

現在世界的にみられるイスラーム原理主義の復活は、インドネシアでも顕著になりつつあり、ス

カテンというジャワに独特なイスラームの実践は、それとの齟齬を生じ始めてもいる。イスラームの基盤的な礼拝の場であるムスジッドに、圧倒的にヒンドゥー・ジャワ的なガムランの音が響き渡ることに違和感を感じる人々もいる。そこで行われる非イスラーム的なウィルジュンガンに抵抗感を持つ向きもある。今までのところ大っぴらな反対行為は行われていないが、ガムランに対する畏敬の念が感じられないような行為は散見される。

また、インドンネシア政府としては、国の統一を保つためにも、王家の持つカリスマ性が強調されることを好まない。大きな流れとして、スカテンを含む王家の活動を観光化し王家の持つ存在感を観光資源に転嫁することが望まれている。王家の側からは独自性・独立性を保つための努力が、その動きに対する抵抗として行われている。かつて、先代の王パクブウォノXII世は筆者に言った。「政府は私に立ったまま死ねというのか。」と。スカテンの実行は、色々な意味で、今、王家がいかに生き残っていくかを見る試金石である。

（この論文は2011年度本学在外研究助成による現地調査の成果の一部である）

注

[1] ジャワ暦三番目の月。

[2] 直訳すれば、誕生・路を外れた人々を導くために神によって使わされた人・ムハンマド・彼に神が祝福と平安を与えんことを、となる。muludan とも呼ばれる。

[3] 1945年のインドネシア独立以前、欧米からオランダ領東インドと呼ばれていたこの地域には多くの王国（王権）が存在した。現在も20の旧王国が Kĕraton Nusantara という連合を形成して、文化活動を行う。

[4] 渥美堅持『イスラーム教を知る辞典』　東京堂出版、1999　p243

[5] ムハンマドがムッカからマディーナに移住した西暦622年を元年とする太陰暦。一年が354日で構成される。

[6] 太陽暦であるサカ暦から太陰暦であるヒジュラ暦への移行を行ったが、西暦78年を元年とするサカ暦の年を残すという、折衷的なものである。西暦1633年（サカ暦・ジャワ暦1555年）に施行された。従って、ジャワ暦とヒジュラ暦との間に512年の差がある。

[7] 13世紀末から15世紀末まで中・東部ジャワを支配した王国。14世紀が最盛期であり、ヒンドゥー・ジャワ文化の爛熟を見た。

[8] スクティ sĕkti を語幹とするジャワ語。人を超えた力を持つこと。

[9] ＜manunggaling kawula gusti＞は、王と人民の関係は神と神の子（人）との関係に類似するもので、前者は後者を保護し後者は前者に忠節を誓うべしとし、その融合と一体化を意味する。

[10] スルタン・アグンの時代に作られたという“ブドヨ・クタワン”という９人の女性による舞踊は、イスラーム・マタラム初代の王と南海の女神の交流の伝説を演じる。

[11] サジ saji を語幹とするジャワ語。様々な目に見えない存在・精霊・祖霊などに捧げられる供物。多様なヴァリエーションがある。

[12] 土屋賢治『インドネシア　思想の系譜』　勁草書房、1994　p19

[13] ㋐Yogiswara は王たちの墓、歴史的宗教遺構、などの管理、様々なイスラーム関係の活動を統括する。㋑Keputren は女性のみで構成され、多くのプソコの世話、サッジェンの作成、宮廷女性舞踊家たちの世話、王の身の回りの世話、後宮の管理を行う。㋒Mandrabudayaは、音楽、舞踊、兵士、などの管理をする。

[14] 伝統音楽を意味するこの語は、rawit（繊細なる・緻密なる）を語幹とするジャワ語である。現在はインドネシアで広く用いられている。

[15] 終身職であり、王族、または、それ以外の人物でもそれに近い身分を与えられる。2008年から、KRA Saptodiningrat 氏が務めている。

[16] 15世紀末から16世紀初めごろジャワに神秘主義イスラームを伝えたとされる９人の聖者。

[17] 15世紀後半、中部ジャワ北岸に成立したイスラームを標榜する最初の王国。その成立には、ワリソンゴが大きな役割を果たしたと言われている。

[18] スロカルト王家のガムラン・スカテンのサロンの鍵盤はずっと重く３キロ以上ある。
当時としては重いものだったのかもしれない。

[19] 参考文献７．①

[20] アンソニー・リード『大航海時代の東南アジアⅠ』平野秀秋他訳、法政大学出版局、1997

[21] ジャワ語は複雑な敬語体系を持つ階層語である。大きく、ンゴコ ngoko（非尊敬語系）・クロモ krama（尊敬・謙譲語系）・マディヨ madya（混合系）、の三に分けられる。

[22] その楽器の一つサロンの台座に彫刻された「籠に飾られた果物」"rĕrĕnggan(6) woh-wohan(6) tinata(5) ing wadhah(1)" を、sĕngkalan mĕmĕt という単語に数字を対応させる年号の表し方によって( )内のように判じることができる。ジャワ暦1566年（西暦1644年頃）を指す。（写真６－⑤参照）

[23] 参考文献６

[24] Monggang, Carabalen, Kodhok-ngorek の三種が主なものである。

[25] アラビア語起源の語。

[26] ムスジッド・アグン（大礼拝堂）は、スロカルト王家の所有するものである。運営はイスラームの教団に任されている。その責任者 tapsir anom は王家から任命され、両者をつなぐ役目を果たす。

[27] Bangsal は建物の意、pradonngo はガムランの世話をする役目の人々のことである

[28] KRA Saptodiningrat 氏より

[29] ① Isak19：00頃　② Subuh　早朝　③ Luhur12：00　④ Asar15：00頃　⑤ Makrib18：00頃、の五回

[30] 主たる歌い手、または演奏家がメロディーを先導し、その他の人々が後に付けて唱和するような合唱（合奏）の形式をいう。

[31] 文献６

[32] ７日を単位とする30のウク wuku からなる210日を周期とするウク暦の29番目のウクであるドゥク Dhukut に供される供物の種類。非常に大規模なもの。

[33] イスラームの三大祭、断食明け、巡礼月、誕生祭に行われる祭りを指す。山車の巡行を伴う。

[34] 山の形をした物、の意。hajat parĕden ともいう。

[35] ガムランの演奏される二つの建物の正面に、それぞれ「ashadualla illahailallah」「waashaduanna muhamadarrasululla」とアラビア文字で書かれた大垂れ幕がかかっているのはシンボリックである。それぞれ、「私は、アッラーのほかに神はないと言明します。」「私は、ムハンマドが神の使徒であると言明します。」の意である。これらはシャハダ（信仰告白）と呼ばれ、イスラームに入信するには、これらを唱えることで足りるのであるから。

参考文献

１．Bram Setiadi. " Raja Di Alam Republik", 2000
２．Darsiti Suratman. " Kehidupan Dunia Karaton Suratarta1830-1939", 1989
３．"KARATON SURAKARTA", Yayasan Pawiyatan Karaton Surakarta 2004
４．Paku Boewana IV. "Serat Wulang Reh"
５．Paku Boewana X (susunan bahasa R.Ng.Purbadipura). "Serat Sri Karongron I.II.III.IV"
６．R.Ng.Pradjapangrawit. "Wedhapradangga", 1944
７．Saptono ① Ritual Sekaten di Keraton Surakarta Masa PBXII dan PBXIII, 2006
② Mloyowidodo Sebagai Sumber Sejarah Lisan Sebuah Biografi, 1998
８．Soedarsono. "Agama dan Seni :Beberapa Masalah Pengkajia Interdisipliner Budaya Islam di Jawa", 1985
９．田村史子　『ジャワの宮廷舞踊～宇宙の秩序と調和の舞』「21世紀の音楽入門⑤踊り―身体を通して語るもの」、教育芸術社　2004



4．ムスジッド･アグンの責任者たちに王の命令を伝える
ティンデ･カラウィタンとその随行者たち(俯瞰図の２)



5．バングサル･ブラドンゴの前に運ばれたゴングソ･スカテン
ゴング･アグンに敬意の傘がさしかけられている(俯瞰図のA)



3．王家の北の出口から運び出されるゴンソ･
スカテン(俯瞰図の４から３へ)



2．ゴンソ・スカテンに祈りと供物をささげる
Mandrabudaya のリーダーと
ティンデ・カラウィタン(俯瞰図のB)



1．祭りの成就を願うKĕputren の
アブディ･ダルム(俯瞰図の５)

図:スロカルト王家主要部の俯瞰図(南北約1.25㎞)
図内の棒線はゴンソ･スカテンの行幸とグヌンガン巡行の道筋
(文献３、p89の図を元に作成)



A．バングルサル･ブラドンゴ
B．ラングンカトン
(ゴンソ･スカテン収納場)
１．北の広場
２．ムスジッド･アグン
３．北のシティンギル
(対外儀礼の場)
４．スリマガンティ
５．プラタラン･クダトン
(主殿と前庭)
６．クダトン(王の居所)
７．マガガン
８．南のシティンギル
９．南の広場



ボナンを演奏しリードするティンデ・カラウィタン
KRT Saptodiningrat 氏



ウィルジュンガンでイスラームの祈りを唱えるウロモ達



編成楽器
①ボナン（手前★印）
②ゴング・アグン
③サロン・ドゥモン
　サロン・バロン
　サロン・パヌロス
④ブドゥグ
⑤サロン・ドゥモン
⑥クンピヤン（左隅★印）



6．バングサル・プラドンゴでの演奏とウィルジュンガン
（①～⑥は編成楽器）



サロン・ドゥモンの台座に籠に飾られた果物の彫刻が見える





7．ムスジッド・アグンに向かって巡行する山車グヌンガン
手前が〈男〉後が〈女〉



8．山車グヌンガンを先導するゴンソ・スカテン



9．ムスジッド・アグンでハジャット・ダルムにイスラームの祈りが唱えられる



10．ムスジッド・アグンの中庭で群衆に囲まれるグヌンガン

【撮影：田村史子・古屋均】

（たむら　ふみこ：アジア文化学科　准教授）